

## 僕の町が壊れた日

学校法人鎮西学園真和中学校 3年 清永 阜樹

それは本当に突然起きた。二〇一六年四月十四日、夜。ゆらゆらと地面が揺れ出し、家が軋み始めた。僕は立ち上がることもできず、必死に床をつかんでいた。震度七の揺れが二八時間以内に二度も襲った熊本地震。六歳だった僕は、揺れが収まってからも家の中にいるのが怖くて、しばらく車の中で過ごした。古い家だからあんなに揺れたのだと思っていた。でも、住んでいた阿蘇から祖父母の住む益城町へと向かう道すがら目にしたのは、大きく地割れしうねる地面、崩落した道路、倒壊した家屋、機能しない信号と、さんざんに壊れた町の様子だった。この地震で阿蘇カルデラ外輪山の崖は横幅約二〇〇メートルが崩れ落ち、交通の要衝も土砂に呑まれた。頑丈な阿蘇大橋まで橋げたから崩落した。見慣れた景色は一変した。この地震での人的被害は直接死五〇人、関連死二二三人。車中泊を余儀なくされた人も多く、避難生活は苛烈さを極めた。公になった負傷者だけでも約二八〇〇人。その他、建物被害や停電、断水によるライフライン問題、交通インフラ麻痺による生活への影響に皆が打ちのめされた。日常が巨大な暴力によってあっけなく奪われ、それぞれが命を守ることだけに集中したあのとき、復興への気力もお金も足りてはいなかった。

今、僕は安全に整備された町、耐震化の進んだ学校で学ぶことができている。発災直後に県知事が「創造的な復興」という方針を掲げたように、地震前より安全で便利な町がつくられてきたからだ。ここには国や県、市町村の税金が使われている。予測困難な災害で国民の安全な生活が揺らがないよう、復興に充てられる税金があった。その税金は湯水のように湧き出るものではなく、誰かが限りある自分の時間やエネルギーを注いで得た収入から払われるものだ。小学生の頃、僕はお菓子を買うのにレジで一円足りなかつたことがある。でも後ろに並んでいた人がそっと一円を渡してくれて会計を済ませることができた。所持金の把握もせず、見知らぬ人にお金を出してもらうなんて反省すべき出来事だ。でも、僕ががっかりしないようにと差し出してもらった一円はあたたかく、忘れられない出来事となった。僕の町が壊れた日、誰もが不安そうな顔をしていた。でもその日から税金が動き続けて、各分野での地道な作業が続けられて、町も人々の希望もよみがえった。失われた命だけは戻らなかつたけれど、震災で起きたことを記憶し教訓を後世に伝えるため「熊本地震 震災ミュージアムK I O K U」が建てられた。直接もらった一円同様、税金はとてもあたたかかった。僕は税に感謝している。

税金は災害だけでなく社会保障や教育、公共事業等、安心安全な暮らしのすべてに使われる。僕は税の恩恵を自覚し一生懸命学ぼうと思う。そしてしっかりと納税する大人になり、受けたぬくもりを巡らせていくたい。